

ピクチャレスクの通俗化

——ウェスト『湖水地方案内』——

Popularization of the Picturesque

——Thomas West, *A Guide to the Lakes*——

今村隆男

Takao IMAMURA

(和歌山大学教育学部英語教育教室)

2016年9月27日受理

In the mid-18th century tourists had already begun to write travel writings for the Lake District, which were brought to their destination as a kind of guidebook. Then Thomas West's *A Guide to the Lakes* (1778) appeared as the first book which has "Guide" in its title, that testifies the expansion of the picturesque tourism. Its practical advices for the tour, detailed quotations from famous precursors, or the introduction of tourism industry, are the examples of the popularization of the tourism. While the author was too much concerned with the practical information, he was confronted with how to describe the landscape of the lakes with words, because landscape viewing was the main purpose for the tourists of that day. This paper shows the popularization of the tourism caused a kind of mannerism in the expressions, and this required further elaboration of the descriptions.

1

18世紀半ばから始まったピクチャレスク・ツアーの拡大を示すガイドブックに、ウェスト(Thomas West)の『湖水地方案内(A Guide to the Lakes)』(1778)がある。「半世紀にも渡って殆ど全ての訪問者が携えていった」という湖水地方最初のこのガイドブックは、ピクチャレスク・ツアーの人気に支えられてブームが一段落する1821年までに11版を数えるほどの需要があった(Bicknell 33-9)。この人気にも関わらず、著者ウェスト本人については余り多くのことは知られていない。湖水地方近くのドルトン(Dalton in Furness)の教会の神父に任ぜられて以降湖水地方南部に住んでいたことはわかっており、そこでの経験によって彼はこの地域の事情に精通するようになったようである。その結果、『ファーネスの故事(Antiquities of Furness)』(1774)という歴史書とこの『湖水地方案内』が生み出されることになる。

ギルピン(William Gilpin)が湖水地方を旅したのは1772年であったが、ガイドブックとしての目的も兼ねて手記を出版したのは1786年なので、あとに書かれたと思われるウェストのガイドブックの方が先に世に出たことになる。観光熱は「あらゆる階級の人々」にまで広がっていると『湖水地方案内』の冒頭でウェストが述べているように、ギルピンの執筆からウェストの出版までの間に自然の風景を鑑賞する目的の旅は特別な階層のみならず一般の人々へ急速に浸透して一つの文化となっていった。グレイ(Thomas Gray)やペナント(Thomas Pennant)など学識を積んだ文人による見聞を広めるための旅は、ウェストの時代に通俗化していったと言えるだろう。ウェストが出版の翌年に亡くなった後、1780年にコッキン(William Cockin)が第二版を出す、それはさらに湖水地方の観光化を押し進めた。初版から著者名はウェストの名ではなく、『ファーネスの故事』の作者」となっており、第二版でもコッキンの名前が「X」としか表記されていないことは、本書がもっぱら実用書として意図されていたことを示唆している。実用書であった上、風景のカatalogに過ぎず想像力を喚起しないなどの低い評価をされているにも関わらず、ウェストのこのガイドブックは当時の人気ゆえにピクチャレスクの展開を考える際には見落としてはならない資料であると思われる(Cf. Nicholson 57)。比較は簡単ではないが、ギルピンとの相違や類似を念頭に置きながら、ウェストのガイドブックを読んでみたい²⁾。

2

冒頭でウェストは、湖水地方への旅を薦める理由を二つ挙げている。湖水地方は「アルプス的な景観(Alpine scenery)」が楽しめる所であるとされ、それを含む多彩な風景を見ることができることが第一の理由である。アルプスとの比較は本書の中に一貫して見出され、高さでは及ばないものの、アルプスを越える数々の魅力を持つのが

湖水地方であると彼は主張する。大陸の政情不安のためにイギリス人がアルプスやイタリアに行きにくくなったことが背景にあるので、国内有数の山岳地である湖水地方とアルプスとの比較は全く不思議なことではない。また、湖水地方がアルプスに劣らぬ根拠として、多様な自然美が「これほど狭い地域の中に集まっている」場所は他には無いことが挙げられているが、この表現はワーズワス(William Wordsworth)の『湖水地方案内(Guide to the Lakes)』を想起させるものである(1-2)³⁾。続けてウェストは、この地域の道路事情が改善されていることを強調する。彼はグレイやペナントという湖水地方の旅行記をすでに書いている二人の著名な先達の名前を挙げ、彼らの時代よりも「かなり改善された」と言う(4)。ウェストの主張を信用すれば、ペナントが旅をした1772年から本書の出版まで6年しか経っていないにも関わらず、わずかの期間に大きな変化があったことになる。また、道路事情の問題が湖水地方への旅を薦める二番目の理由として挙げられていることは、本書が風景美を想像して楽しむための教養書ではなく、実際に旅をしようとしている人々のための現実的なガイドブックであることを意味している。

実際に旅行をしようとする人々のため、ウェストはまず適切な旅行シーズンについて説明する。彼は、グレイの旅した秋やペナントの旅した春ではなく、6月初旬から8月下旬がベスト・シーズンであるとしているが、その理由の一つとして、この時期が「植物の研究」に適しているということが挙げられている。これは、ピクチャレスク・ツアーの流行は博物誌の関心と同じ時期であった証しでもあり、『セルボーンの博物誌(The Natural History of Selborne)』(1789)の書簡の相手であったペナントの書いた旅行記の引用や言及は本書に頻繁に登場する⁴⁾。しかし、ウェストが湖水地方へのツーリズムを薦める主たる理由は、「研究」活動ではなく様々なエンターテイメントと呼べるものである。ウェストは旅先での風景の様々な楽しみ方を具体的に紹介しているが、その一つは望遠鏡とクロード・グラスを使用することである。クロード・グラスと呼ばれるものには二種類あるが、彼が「風景鏡(the landscape mirror)」或は「凸面鏡(convex reflecting glass)」と呼んでいるように、ここで取り上げられているのはルーペではなく鏡の方で、大きさや鏡の色の使い分けなどが詳しく解説されている(14-5, 73)。その他、朝夕の乗馬や、手漕ぎボートとヨットの二種類の船遊び、そして釣りなど様々な楽しみが簡潔にはあるが言及されており、各湖で釣れる魚の種類は必ず挙げられている。今日の観光客が携帯するカメラなどに相当するクロード・グラスを含めて、ウェストが挙げている旅の楽しみ方は現代的な旅と重なっていると言えるだろう。

本書では実用のための様々な情報が提供されているが、その中で最初に挙げられているのは「選りすぐった眺望点(the select stations)」の紹介である(3)。これは、彼が読者対象としている観光客の主たる目的が風景を見ることであったことを示している。実際に、本書の記述の中の多くの部分を「眺望点」から見た湖の風景の解説が占めているといっても過言ではない。一例を挙げると、ダーヴェント湖の第四眺望点(STATION IV)となっているカースル・クラッグ(Castle-Crag)は現代の観光客もよく訪れる有名な場所であるが、そこでの記述の殆ど全てはカースル・クラッグの南北両側の眺望の詳細な解説である(97-103)。ウェストはそこで、「登り口は、頂上から切り出したスレートを運ぶ為に山腹に作られた狭い道を行けばよい」と付け加えている。アクセスに関するこのような具体的な解説は他の旅行記にはない本書の独創性の一つであるが、これだけでは実用情報は十分とは言えなかったため、これらの「眺望点」は第二版が出版されたあとの1783年に出たクロスウェイト(Peter Crosthwaite)の湖水地方地図(Seven Maps of the Lakes)に記され、その位置は観光客に周知のものになっていったウェストのガイドブックの実用性はますます高まっていった。

ウェストは、具体的なガイドに入る前にこの地域に旅をする効用について解説している。自然の山川との交わりは都会の喧噪を忘れさせてくれ、澄んだ空気や水を満喫することは健康にもよく、病弱な人々にも意義があると彼は言うが、このような旅の効用は現代でも変わる所は無い(4-5)。そして、僧職にあったウェストが最も強調するのは、旅先で崇高なものに接することで「心は拡大され」、「創造主の御力」を感受することができるということである(4)。この点は、同じ時期に旅行の記録を残し出版したギルピンとはもちろん、遡れば自然の仕組みを解き明かすことで神の力の偉大さを明らかにしようとしたニュートンらとも共通している。

背景に神性の称揚があったにせよ、本書の中で著者は読者の旅の利便のために様々な工夫をこらし、実用的価値を高めようとしている。そのために彼は、広い湖水地方を周遊する場合にはどのようなコースを取ればよいかを理由を添えて解説し、「眺望点」に至る道案内を行い、巻末には目的地間の距離を伝えるリストを載せている。また、命令形の記事(“Ascend. . .”, “Proceed through. . .”, “Observe. . .”など)を多用したり、方角や場所を特定する(“to the N.E.”や“between the third and fourth milestone, on the top of a rock on the east side of the road”など)ことによって読者への指示を明確にしたり、主な見所となる湖や町の名前は文中で小見出しにして明瞭化するといった努力をしている。さらには、訪問を特に推奨する場合はそのことがわかるように表現する(“they ought never to be omitted”など)といった、今日のガイドブックでは当たり前になっていることも既に行っている。その他、ウェストは一つの地点からいくつかの目的地へ「遠出(excursion)」を勧めるという手法も利用している。彼の「案内」は基本的には周遊式になっているが、それでは紹介し切れない場所が残ってしまうため、いわゆるオプ

ショナル・ツアー形式を導入することでその課題を解決しているのである。この工夫も現代のガイドブックに踏襲されていることは、言うまでもない。

3

それでは、具体的な記述に沿いながら要点を整理していきたい。ウェストは案内を始めるに先立って、湖水地方周遊のコースについて解説する。主として北のペンリス(Penrith)の町から入るコースと、南のランカスター(Lancaster)の町から入るコースの二つがあるとされるが、後者のコースを辿れば、風景は「好ましい(pleasing)」ものから「驚くべき(surprising)」ものへと移り変わると言う。彼はさらにそれを具体的に、「繊細でエレガントな」コニストンから始め、「堂々たる(noble)」ウィンダーミアへ、さらには「驚異的な(stupendous)」なダーヴェント湖へというコースであると説明し、それぞれの湖はクロード、プッサン、ローザの絵にふさわしいと表現する(13-4)。当時注目されていた3人の画家の風景画の特徴になぞらえて湖を紹介するという方法は、ジョン・ブラウン(John Brown)を始めとしてウェスト以前からしばしば行われて来たものである。この3人の画家への言及は後期ピクチャレスクの理論家であるプライスやナイトにまで残ることになるが、徐々にその役割は薄められて形骸化してゆく。しかし、ウェストにおいては未だこの3人が絶対的な風景の準拠枠となっており、彼らの絵を自ら解釈したり評価したりしようという意識は見られない。ここで彼は3人の画風をそれぞれ定式化し、その上で穏やかな風景から激しい風景へという周遊順路を支持し、実際に南側からのコースを選択する。

南側から湖水地方に入って行く場合に最初の訪問地になる町はランカスター(Lancaster)であるが、ウェストがそこで詳しく説明するのはこの町や城の歴史である。本書では一貫して、歴史についてのかかなりの説明が行われている。特に自らが居住していたこの地域の歴史について彼は詳しく、『ファーネスの古事』を出版していることはすでに触れた通りである。また、実際には旅行は通俗化していったとは言え、旅行を通して教養を高めることをツーリストが求められるのはこの時代の共通認識であったと思われる。そのあとランカスターを離れる前に、彼はそこからロンズデイル(Lonsdale)へ足を向けることを薦めるが、それはグレイがそこを訪れて「非常にすぐれた手記」を残しているからであるときれ、その手記のページ数まで記して該当箇所をそのまま引用している(29-30)。著名な先達の名前を挙げて引用する手法はこの後も頻繁に見られるが、多くは引用文の単なる紹介あるいは利用であり、ロンズデイルの例ではその後にはウェスト自身の意見は全く述べられていない。これは、著名人の文章の導入による一種の権威付けのようなものであるとみなしてよいだろう。

山々の景観を楽しみながらウェストはアルヴァストン(Ulverston)に至る。アルヴァストンは中世にファウンテンズ(Fountains)修道院と共に湖水地方の土地を二分して大勢力を有していたファーネス(Furness)修道院の領地内で栄えて来た町で、まずウェストはその町の宿屋(inns)について解説する。ガイド達によって運営されている町の宿屋の食事やサービスが申し分無く、料金もリーズナブルであるとの彼の説明は、この町では観光産業がすでに定着し始めていることを示している。アルヴァストンでは主たる見所である修道院の廃墟が非常に詳しく説明されているが、その前に彼は地域の産業に言及している。それによれば、この町では農業の他に鉄鋼業が盛んで、その鉱山は「イングランドで最大」であるとされる(38-9)。ギルピンもボロウデイルの黒鉛工場に触れているが、ここには観光とは異なる湖水地方の一側面を窺い知ることができる。しかし、ギルピンと同様に、「動物や植物への害は無い」し人間が近くの水を飲んでも大丈夫であると、ウェストも鉱山の悪影響は完全に否定しており、環境への視点は認められない(39)。

南のランカスターから湖水地方に入った場合、最初に訪れる湖がコニストン(Coniston Lake)である。この湖の周囲の風景は、以下のように総括されている。

It will be allowed that the views on this lake are beautiful and picturesque, yet they please more than surprise. The hills that immediately inclose the lake are ornamental, but humble; the mountains at the head of the lake are great, noble, and sublime, without any thing that is horrid or terrible; they are bold and steep without the projecting precipice, the overhanging rock, or pendent cliff. The hanging woods, waving inclosures, and airy sites, are elegant, beautiful, and romantic; and the whole may be seen with ease and pleasure. (56)

この湖の光景は美しくピクチャレスクであると認めてよいだろうが、それは驚きよりも喜びをもたらすものだ。湖の周りを囲んでいる丘陵には風景を飾るものが多いが、いずれも目立ちすぎではない。湖頭の日々は偉大で崇高だが、恐ろしいという感じではない。突き出た絶壁や崖、落ちて来そうな岩はないが、険しい山だ。迫り出した木々や波打つ囲い込みの石垣などはエレガントで美しく、ロマンチックだ。風景全体は、安楽と喜びで見ることができる。

「美しい」、「崇高」、「ロマンチック」、「エレガント」、そして「ピクチャレスク」—— 風景を形容するこれらの

言葉は、それぞれの意味を明確に定義して使い分けされているようには思われぬ。「驚き」をもたらす崇高と「喜び」をもたらす「美」という大まかな区別はなされており、この風景はやや後者に属すると判断されているようではある。しかし、「ピクチャレスク」という表現は、のちにプライスやナイトが美学的に区別しようとした「美」と「崇高」を共に取り込んでいて、ここでは区別はされていないと考えてよいだろう。アルヴァストン近く、海岸寄りに位置するコニスヘッド(Conishead)からの眺めは「非常にピクチャレスク」で、「好ましくかつ素晴らしく、牧歌的で田舎風で海岸らしい(both pleasing and surprising, pastoral, rural, and marine)」風景だと表現されている(46)。ここでも、それぞれの言葉は適当に羅列されているだけのように思われ、表現されている風景は明瞭な輪郭を持ち得ないと言ってよいだろう。これは、風景を表現する際に使われる言葉の定義が未だ曖昧で、その使用法は整理されてはいなかったことを示している。

4

コニストンからウェストは、後にワーズワスがグラマー・スクール時代に住むことになるコルトハウス(Colthouse)村やベアトリクス・ポター(Beatrix Potter)が住むことになるソーリー(Sawrey)村を抜け、ウィンダーミアに進む。湖水地方最大のこの湖でウェストは五カ所の眺望点を設定し、そこから楽しめる風景の詳細を描写している。そのうち、西岸のフェリー乗り場近くの「第一眺望点」は「このよく知られた眺望点」(59)とされているように、ウェストが見出したものではなく多くのツーリストにとってすでに有名になっていた場所である。眺望点は他の主立った湖においても設定されているが、その多くが既知の地点をウェストが追認したものである。眺望点からの具体的な風景描写の中にも、先達からのそのままの長い引用が少なくない。これらの事実は、ウェストの目的は新しい情報を提供することではなく、ツーリズムの隆盛と共に氾濫しつつあった各地域の情報を収集し、その中から価値あるものを選び出して整理し、読者にとって有益な形にして提供することであったということを示している。

クレイフ・ステーション(Claife Station)とも呼ばれるこの「第一眺望点」への道順の説明はやはり極めて簡略的であるが、そこからの眺望の描写は非常に詳しく、5ページに渡ってどのような風景がそこから眺められるのかが丁寧に説明される。全長18kmにも及ぶ細長い湖の中央部に位置するこの場所からは、左右に広がって伸びている「二つの風景」を両方共、美しく見ることができる。ここに描かれた風景は、前景、中景、遠景、サイド・スクリーンからなる理想的な「構成」による典型的なピクチャレスクの眺望として描かれている——前景には木々があって彩りを添え、中景は湖岸のサイド・スクリーンに囲まれて半円形の入り江になっていて、そこにはいくつかの小島(Holm)が浮かんでおり、背後には山々が遠景をなしている。これは、ギルピンが『ワイ川紀行』で提唱している風景の定型的な捉え方に全く適合している。

この場所は湖の小島の影に遮られて遠方が見えない程低くもなく、激しい恐怖感を感じるほど高すぎることもない適度な高さの所を慎重に選んで定められているが、これもギルピンの主張に沿ったものとなっている。そこには以前から、地元の地主のブレイスウェイト(Revd William Braithwaite)が八角形の建物を建てていたが、ウェストのガイドブックによって人気が出ると、その建物は景観を楽しむための二階建ての夏の別荘(summer house)に変えられた⁵⁾。この建物の最大の特徴は、二階の湖に面した方の窓に色ガラスが嵌め込まれていたことである。現在の所有者のナショナル・トラストの説明によると、ピクチャレスクの眺望をより楽しめる効果を出すよう二階のドロ잉・ルームには湖に面して大きな窓が付いており、各々に色ガラスが嵌められていた。夏の風景を楽しむための黄色、秋の風景のためのオレンジ、春の風景のための黄緑、冬の風景のための水色の他、月明かりの効果を出すための濃紺や雷の印象を与えるためのライラック色のガラスまで入れられていたという。ツーリスト達はこれらの色ガラスを通して眼前に広がる風景を見て、各々のガラスの色が与える人工のイメージを通して風景を楽しんでいたと言える。これは、まさしく鏡ではなくルーペ型のクロード・グラスの効果と重なるものである。つまり、クレイフ・ステーションの建物は、言わば巨大なクロード・グラスであったと言える。定式化されたクロード、プッサン、ローザの絵画に当てはめて風景が見られたのと同様に、そこでは鑑賞者の想像力は要求されない。「第一眺望点」におけるツーリストの楽しみの発展は、初期のピクチャレスクの観光化の実体を如実に示している。

「第一眺望点」から見られる風景に関して注目しておきたいのは、その目の前にある湖内で最大の島ベル・アイル(Belle Isle)の変化である。非常に美しかったこの島では土地の「改良(improvement)」が行われていたが、ウェストはそれについて次のように落胆を隠していない。

Of this sequestered spot Mr. Young speaks in rapture, and Mr. Pennant has done it much honour by his description. But alas! it is no more to be seen in that beautiful unaffected state that those gentlemen saw it in. The sweet secreted cottage, and the sycamore grove, are no more. The present owner has modernized a fine

slope in the bosom of the island into a formal garden; an unpleasing contrast to the natural simplicity, and insular beauty of the place. What reason he has for adopting such a plan, I shall not enquire, much less treat him with abuse for executing it to his own fancy; the want of choice might justify his having a garden on the island; but since it is now in his power to have it elsewhere, I hope it will be his pleasure, when he revisits the place, to restore the island to its native state of pastoral simplicity, and rural elegance. (63-4)

この隔絶の地をヤング氏は恍惚として語り、ペナント氏はその魅力を余すところなく描いた。しかし、ああ！これらの紳士達が目にした美しい以前の姿はもはや見られない。人目につかない心地よいコテージとスズカケの森はどこへ行ったのか。現在の所有者は、島の素晴らしい斜面を現代風の整形式の庭に変えてしまった。それは、自然の簡素さや奥まった場所の美しさと不愉快な対照をなしている。一体どんなわけがあって彼はそんな計画を採用したのかと尋ねるつもりはないし、ましてやりたいようにしすぎだと非難もしない。選択肢が限られているので彼は島に庭を造ったのだろう。しかし、今では彼は他の所にも庭園を造ることができるのだから、牧歌風の簡素さや田舎風の優美さといった元の状態を島に回復してもらいたいものだ。

1772年にペナントが2回目のスコットランドへの旅行の途中でここを訪れた際には、美しい森と建物があると記しているが(Pennant 38)、翌1773年に訪れたハッチンソン(William Hutchinson)は、「この島(=ベル・アイル)のわずかな自然の美は、真直ぐな一直線に並んだ樅の樹の醜い列や、所有者のイングリッシュ氏がが行っている作業によって、傷つき歪められている。彼は四角い庭園を計画中で、フルーツの木の壁を作り、別荘を建てる準備をしている」(Hutchinson 177)と述べており、この記述はウェストと矛盾しない。この島の美しさが保たれて来たのは所有者が変遷したからだと言っているが、皮肉なことに彼の訪問の直後にこの島を購入したノッティンガムの商人イングリッシュ(Thomas English)によって、それは変更されてしまった(Ousby 160-3)。

ただ、本書がガイドブックであることを意識してか、この「改良」へのウェストの批判はハッチンソンやワーズワスほど辛辣ではない。批判の部分にはハッチンソンとは違ってイングリッシュの名前は出てこないし、建築中だった別荘の建物に関して「見事なもの」(74)であると肯定している。ハッチンソンは「スズカケの小さな森がコテージを守っている」(Hutchinson 177)と述べているが、ウェストの「人目につかない心地よいコテージとスズカケの森」があったという表現はこれを踏まえたものであり、この森やコテージはハッチンソンの訪問の後、ウェストが本書を出版する1778年までにはすでに消失してしまったことがわかる。のちにワーズワスも『序曲』の中で、この島にあった「あかるい暖炉の火とスズカケの木陰を誇っていたコテージ」(ii 154-5)はすでになくなっていると嘆くことになるが、これは当時まだコッカーマス(Cockermouth)にいた少年の直接の目撃によるとは考えられず、この表現もハッチンソンかウェストを踏まえたものだろう。

このコテージに代わってハッチンソンの訪問時に建設中であった別荘が完成し、その後焼失しながらも再建されて現在に至っているが、この円形の建築物を設計したのは建築家プロー(John Plaw)だった。プローは自らのコテージのパターン・ブックの口絵として、高台からこの建物を遠望している二人の女性の姿が典型的なピクチャレスク風景の構図で描かれた絵を掲載し、この建物が自らの作品であることを宣伝している。ワトキン(David Watkin)によれば、この建物はピクチャレスク流行の高まりの影響によって湖水地方に建てられた最初の建築である。プローの円形建築は、ヘンリー・ホア(Henry Hoare)がクロード・ロランの絵画「デロス島のアイネイアス」に描かれた建物を模してスタウアヘッド(Stourhead)に作ったと一般に言われている、ローマ神殿風の「パンテオン」と同じ趣向のものである(Watkin 109-10)。ウォルポールはスタウアヘッド庭園を「世界で一番ピクチャレスクな景色の一つ」⁹⁾であると絶賛しているが、この庭を代表するのが1754年に建てられたパンテオンを湖越しに望む風景である。ベル・アイルの例も規範とされるクロード・ロランの絵画の模倣であると言ってよく、独自の解釈や表現は見出せない。また、大銀行家であったホア家の庭園と比べると、ツーリストの集まる地にこの別荘が建てられたことはピクチャレスク流行の裾野が拡大していったことを教えてくれる。クライフ・ステーションやベル・アイルの建物は、湖水地方の観光熱の高まりによるピクチャレスクの通俗化の一面を象徴的に表していると言える。

ウェストの死後コッキンが出版した『湖水地方案内』の第二版と初版との相違点を確認することによっても、観光産業が発展していった様子が理解できる。まずコッキンはウェストの本文に注釈を付けているが、ベル・アイルについての注釈は非常に長い(2nd ed. 60-1)。コッキンはそこでイングリッシュの「改良」へのウェストやハッチンソンの批判に異を唱え、その変化はこの地主が有用性を尊重した結果であると擁護している。コッキンは、自然の景観だけでも美しいには違いないが、「レンガや石のできた役に立つ建築物があれば」なお素晴らしいと述べ、自然と人為の融合の意義を強調している。自然と人為との関係は結局はバランスの問題であるが、コッキンの立場は有用性や人為性を優先したものであることは明白である。この他にも彼の注釈の中にはウェストの見解に沿わないものがあるし、また本文の後ろには彼自身も含めた様々な著者による10編からなる「補遺(Addenda)」が載せられており、『湖水地方案内』はウェストの手を離れて総合的案内書へと変わっていった。「補遺」の中のコッキンが書いた

「ファーネスの山々(Furness Fells)」では、目立つ高台の上には「円柱やオベリスク、神殿」などの人工物を「裝飾」として置くことが望ましいとしているが、ここにも風景美に対する彼の姿勢は表されている(2nd ed. 271)。

イングリッシュによるベル・アイルの「改良」を始めとして、ツーリストとして満足できなかった富裕層の中にはその経済力によって秀でた景観の土地を独占して自分好みの「改良」を施す者が他にも出て来る。これはいわば通俗的ピクチャレスクの典型的な例であり、ベル・アイルに続くダーウェント(Derwent)湖の「牧師島(Vicar's Island)」で進行中だったポクリントン(Joseph Pocklington)の「改良」も賛同しているコッキンは、少なくともその通俗化の推進者となったと言える(2nd ed. 110f, Cf. Ousby 163-7)。一方で彼は注釈の中で新たな詩をいくつか導入し、また「補遺」として、ウェストが本文で引用している文献の中からケズウィックの風景を描写した「ブラウン博士の手紙」、「グレイ氏のジャーナル」、ドールトンとカンバーランド(Richard Cumberland)の短詩などを付け加えている。これはピクチャレスク・ツーリズムが文化・教養の習得の旅でもあったことだけでなく、これらの文化人の文章がクライフ・ステーションの別荘と同様に風景を見る際の基準とされていったこと、さらには、その文章をあらためてこのガイドブックの中で提示してもらわなければならない程度の教養しか持たないツーリストが増大していたことを示しているのではないかと考えられる。19世紀にはいってこのような別荘地化に関して激しく反発したのが、地元住民の一人であったワーズワスだった。ウェストとほぼ同じタイトルを付けた自らの『湖水地方案内』の中で詩人が、「数年のうちに」湖岸の土地の殆どは富裕層に買い占められるのではないかと危惧した上で、この地域が「国民共通の財産」であるという意識を皆が持つべきだと主張したことや、その主張がのちの国立公園やナショナル・トラストなどの思想の基盤になったということはよく知られている。

また、コッキンによる第二版には、観光の通俗化の他にも、時代の社会的な変化が映し出されている。彼は「補遺」の最後にカンバーランド地方の方言で書かれた詩や、具体例を含めた方言の解説を添えているが、これは旅先の地域の住人への関心がツーリストの中にも生じていたことを意味しているだろう。また、本文に付けた注釈の中では、山を構成する岩石の組成について詳しい説明があるが、ここには当時進展が目覚ましかった地質学への関心が反映されている(2nd ed. 100-102f)。

5

さて、ウィンダーミアから北上してアンブルサイド(Ambeside)を経てライダル・ホール(Rydal Hall)近くの滝を見た後、ウェストはグラスミア(Grasmere)に至る。そこで彼は、この村を「(こんな所にあるだろうとは)想像もしていなかった、この小さな楽園」と呼んだグレイの有名な一節を引用している(82-3)。本書を通してウェストが先達の文章からの借用を盛んに行っていることはすでに述べたが、ここもその例の一つである。引用されるのは、最も多いのがグレイで、ヤングとペナントが続き、その他にはハッチンソンとメイソン、同時代の詩人カンバーランドがわずかに登場する。前三者からの引用は長いものが多く、自らの説明の代わりに引用しているだけであったり、引用の後にウェストの手短なコメントが付されていたりするが、いずれにせよすでにこの三人の名前はこの分野の権威として確立していたがゆえにウェストはそれを利用していると考えるのが妥当だろう。一方で、ハッチンソンに対してはベル・アイルの「改良」への見解などでは賛同しながらも同時に明らかな批判も加えており、ウェストは箇所によっては独自性を強調することも忘れてはいない。グラスミアについて見れば、彼はグレイから長い引用をもって来た上で、この文章を読めばいかなる読者もここを訪問してみたいと思うだろうと言っているが、同時にグレイの薦めるダンメイル・レイズ(Dunmail-Raise)よりもっと適切な眺望点があるとしてウェストはその位置を正確に特定し、眺望のフォーカル・ポイントである湖の小島をグレイが見落としているとも言う(83-4)。

ウェストの先達の踏まえ方にはいくつかのパターンがあることは、小田も主張している(小田 6-7)。それによれば、ウェストは先達の文章を自らの主張の根拠や補強として使う場合と、それを紹介した上で修正することによって自らの案内書の権威を高めようとする場合がある。前者の例の中には、引用符を付けずに断りも無く先達の文章をウェストが自分の記述の中に潜り込ませることがあるが、ベル・アイルの「人目につかない心地よいコテージとスズカケの森」という表現はその例の中に含まれるだろう。一方、後者の場合にウェストが先達の発言を修正しようとして、返ってツーリストの期待を裏切っている可能性もある。これらのことは、1776年までに出版されていたヤング、ペナント、グレイの書によって、すでに風景への接し方が確立していたことを示している。ウェストは、先行書を踏まえた上で自らのガイドブックの差別化を計らなければならなかったのである。そして、本書において先達からの引用が非常に多いことや、あとで述べるようにウェストの表現が直裁的で解説的であるよう意図されていることなどは、著者自身の意見よりも伝えようとする観光情報の客観性の方が重視されていたことを示している。初期のピクチャレスク・ツーリズムにおいては、風景に対する個人の想像力は必要とはされていなかったと考えられるが、この点が変わって行くのは1790年に『趣味の本質と原理に関する試論(Essays on the Nature and Principles of Taste)』においてアリスン(A. Alison)が主観的想像力の役割を強調した項になり、その先にロマン派の自然描

写が来ることになる。

次の訪問地「ケズウィックの湖(Lake of Keswick)」では最も多い8つの眺望点が設定されているが、その理由はドールトンやジョン・ブラウンを始めとしてツーリズムの初期からこのダーウェント湖は特に注目され紹介されて来たためであろう。ここではウェストは、朝日の時間や夕暮れ、或は月明かりの下と、微妙な光の演出が楽しめる時間帯の観光を薦めているが、これはピクチャレスクの風景が光の変化と密接な関係にあることを物語っている。ボロウデイルの谷に少し入った所にあるカースル・クラッグの頂きの第四眺望点のことはすでに言及したが、ここからの描写は風景以外にも注目すべき点がある。それはクラッグの南側の谷にあるロスウェイト(Rosthwaite)の村の話題である(98-103)。そこは太陽の光のもとでクロード・グラスに収めると「驚くほど素晴らしい」風景が見られるだけでなく、住民は「勤勉」で「親切で礼儀正しく、話し好き」で旅人を温かく受け入れ手助けしてくれる、と言う。彼はそこを「小さな魅力的な楽園」とまで呼んでいるが、これはグレイやギルピンの評価と重なる。「奥まった隠遁地」で、「周囲の世間との交渉から殆ど完全に除外されてきた」村であると表現したギルピン同様(Gilpin 196-8)、ウェストも「非常に恐ろしくてロマンチックな山々に完全に囲われた、この本当に密やかな場所」としている。彼らの同じ一面的な表現は、旅先の現地の人々に対する見方、描き方が、それぞれが体験して感じたものではなく、一つの固定観念による定まったものであったことを意味しているだろう。

ケズウィックを起点として、ウェストはバターミア(Buttermere)やローズ湖(Lowes Water)への遠出を紹介している。それはボロウデイルの谷を通るのではなく、ダーウェント湖西岸からの山越えのコースで、それまで訪れる者の殆どいなかった地域である。ここが詳しく紹介されていることや、さらに奥にあるエナーデイル(Ennerdale)やウェスト湖(或はワスト湖、ウェストはWest Waterと表記)にも将来に道路事情が改善されれば馬で遠乗りできるだろうと彼は書いていることは、観光の対象が徐々に広がりつつあったことを示している。たった16軒の家と小さな教会しかないバターミアの村の住人は、「純粋に牧歌的」と言える質素で勤勉な生活を送っており、大陸の山岳部の人々とは比べ物にならない「美德」や「親切さ」を有していると、ロスウェイトと全く同様に美化して描かれる(137-40)。このバターミアはのちに「バターミアの乙女(Maid of Buttermere)」の事件で有名になった村で、この事件の直接の原因となったのはバドワース(Joseph Budworth)が1792年に出した旅行記の中でこの村の宿屋の娘を絶賛したことだった。それ以降、数多くの観光客がウェストの眺望点を見るのと同じようにこのフィッシュ・イン(the Fish Inn)を訪れるようになり、その結果、彼女は結婚詐欺の事件に巻き込まれてしまった(Ousby 174-7)。この村を理想化して描いたウェストもバターミア人気に先鞭をつけた一人であると言えるだろうが、この事件はウェスト以降さらにツーリズムが通俗化、あるいはさらに低俗化していった一例だろう。ピクチャレスクの風景は特定の資質を持つ人にしか見えないとする後期ピクチャレスクの理論家ナイト(Richard Payne Knight)の主張は、明らかなエリーティズムを含んでいるが、それはウェストの書が象徴している大衆化への反発という意味も含まれていたかもしれない。

6

ケズウィックに戻ったウェストが次に訪れたのは、アルズウォーター(Ulls Water)である。湖岸からの風景は、次のように描き出されている。

The bold winding hills, the intersecting mountains, the pyramidal cliffs, the bulging, broken, rugged rocks, the hanging woods, the easy water-falls in some places, and in others the tumbling roaring cataract, are parts of the sublimer scenes in this surprising vale. The cultivated spots wave upward from the water in beautiful slopes, interfered by hedges, waving with trees in the most picturesque manner; mansions, cottages, and farms, placed in sweetest points, are the rural parts, and altogether form the most delightful charming scenes. The accompaniments of this lake are disposed in the most picturesque order. . . . (164)

激しく曲がりくねる丘陵、交差する山々やピラミッドのような崖、突き出たり入り組んだりゴツゴツした岩、迫り出した木々、こちらでは緩やかに流れ下る滝、あちらでは轟々と流れ落ちる瀑布、これらはこの驚くべき谷の崇高なる景観の一部だ。牧羊地は湖面から美しい斜面をなして登って行き、生け垣を横切り、木々を交えながら極めてピクチャレスクにうねっている。ここという場所に建てられた邸宅やコテージ、農場は田舎風で、これら全てが極めて喜ばしく魅力的な景観を形作っている。湖に添えられたこれらのものは極めてピクチャレスクな秩序で配置されている…。

この描写の中で使われている表現は、余りに定型化されていると言える。ここには、粗さや多様性、特徴の対照性など、ピクチャレスクの持つ要素の多くが取り込まれているが、地誌的ではあるが個性性に欠け、風景を前にした書き手がどのように感じたのかも全くわからない。この描写は湖水地方の他の多くの場所でも当てはめられうる

ものである。もし、他の風景と差別化できる要素がここにあるとすれば、湖水地方全体に見出せる様々な風景の特徴がこの湖に収斂しているということくらいだろうか。これは、ピクチャレスク風景を成立させる諸要素が「極めてピクチャレスクな風に」、そして「極めてピクチャレスクな秩序で」配置されているという点で鑑賞するに値する風景なのである。このような傾向は他のピクチャレスク初期の風景描写にも見出せるものだが、その顕著な例として、ほぼ同じ時期に出版されたジョン・スコット (John Scott) による『アムウェル (Amwell: A Descriptive Poem)』(1776) の次の一節を挙げてよいだろう。詩人はそこで、自らの故郷の風景を次のように描いている。

How picturesque the view! where up the side
Of that steep bank, her roofs of russet thatch
Rise mix'd with trees, above whose swelling tops
Ascends the tall church tow'r, and loftier still
The hill's extended ridge: how picturesque!
Where slow beneath that bank the silver stream
Glides by the flowery isle, and willow groves
Wave on its northern verge, with trembling tufts
Of osier intermix't. How picturesque
The slender group of airy elm, the clump
Of pollard oak, or ash, with ivy brown
Entwin'd; . . .

(Scott 284-95)

なんとピクチャレスクな風景か！土手の急斜面には
朽葉色の草葺き屋根が木々と混じり合い
その上に教会の高い尖塔が顔を出し、その向こうには
さらに気高い丘の稜線が伸びている。なんとピクチャレスクか！
土手の下を銀色に光る川が
花咲く小島の脇をゆるやかに流れ、
北側には柳の林が、
そよぐコリヤナギの木立と混じり合い
揺れている。なんとピクチャレスクか、
風そよぐほっそりとした榆や、刈り込みされたオークのクランプ、
そして茶色のツタが絡まるトネリコの姿は…

両者の「ピクチャレスクな」風景が持つ表現方法の共通点は明らかだろう。共に描き出そうとする風景が「いかにピクチャレスクか」を強調しようとはしているが、それぞれの地点を特定できる要素は見出しにくい。眼前の個々の状況が形式化された表現によって列挙されているだけである。ウェストが風景の特徴を説明する際に使っている形容詞に明確な意味付けがなされていないように思われることはすでに触れたが、上記の二つの引用文では名詞も含めて個々の表現がマンネリズム (mannerism) に陥っている。

ウェストの文章の特徴についてアンドリュースは、想像力を喚起するのではなく、単に地誌的に描写しているだけであると言っている (Andrews 160)。少なくとも初期の旅行記でギルピンが目指したのは、既成の表象性をできるだけ排除して客観的に、そして正確に対象を描写することだった。ウェストもここで案内書に徹するために個人の感想を記録することはできるだけ排し、実用的な情報に絞って読者に紹介しようとした結果、単調な表現になってしまったのではなかったか。その背景には、小田が言うように、ガイドを雇わず独力で観光しようとするツーリストがすでに増えており、案内書のニーズが高まっていたということもあるだろう (小田 14)。本書は案内書としての成功とは別に、風景表現において客観的な描写を徹底することによってマンネリズムは避けられなくなることを明らかにしている。

実用書以外の風景描写においては、90年頃以降、対象を見て個人が感じたままの表現をすることが尊重され始めるに及んで、マンネリズムから脱する方法として表現は主観的になってゆき、再び表象性をまとうことに繋がっていった。しかし、その表象性は既成のものとは異なる、想像力に依存する新しいものだった。ハッシーは、ピクチャレスクの功績を、風景の形式や表面的な特徴に集中し、それまで風景内の諸対象に結びつけられていた慣習的な表象的イメージを否定して白紙の状態にしたことで、新しい風景表現への道を開いたことであると評価した。ウェ

ストの『湖水地方案内』は初期のピクチャレスクが目指した客観的描写の典型例であり、実用書として成功した理由もその徹底さにあったと言える。同時に本書は、客観性や正確さが描写の至上価値ではないことを明らかにし、読者に風景を伝えることの難しさを示した作品であると言えるだろう。同じ時代に流行した博物誌でさえも、正確で客観的な描写の中に個人の主観や事実とは異なる情報が見出せる。ガイドブックはウェスト以降も続くことになるが、著者達は旅行記や博物誌の場合と同様に独自の価値観を盛り込むべく工夫をしてゆくことになってゆくのである。

注釈

- 1) ウェストという名前でも途中で変えられたものであり、親が誰かもどのような教育を受けたかも定かではない。わかっているのは、スコットランド出身で若い頃に行商人などをした後、30歳くらいでイエズス会の修道士になろうと学校に入り、1765年に「ウェスト神父」として湖水地方近くのドルトン(Dalton in Furness)の教会に任ぜられ、それ以降ずっとアルヴァストーン(Ulverston)など湖水地方の南部で過ごしたくらいである。DNB、Bicknell(6-7)、小田(1)を参照。
- 2) ギルピンの旅行記は執筆から出版までの間に回し読みされてはいたが、ウェストがその内容に触れる機会があったかどうかは定かではない。
- 3) Cf. Wordsworth, 99-107.
- 4) ただし、ペナントからの引用は殆どが風景描写に関する部分である。
- 5) クレイフ・ステーションの建物についてはAndrews 166、拙論「風景と想像力ーウィンダーミア湖畔のクライフ・ステーションをめぐる」を参照。アンドリュースはPlumptreを参考している。なお、現在はナショナルト・ラストによって廃墟は整備されると共に中庭にカフェが新設され、第二の観光化が進められている。
- 6) Quoted in Malins p.49.

参考文献

- Andrews, Malcolm. *The Search for the Picturesque: Landscape Aesthetics and Tourism in Britain, 1760-1800*. Aldershot: Scolar, 1989.
- Bicknell, Peter. *The Picturesque Scenery of the Lake District*. Winchester: St Paul's Bibliographies, 1990.
- Gilpin, William. *Observations, Relative Chiefly to Picturesque Beauty, Made in the Year 1772, on Several Parts of England, Particularly the Mountains, and Lakes of Cumberland, and Westmoreland*. London: R. Blamire, 1786.
- Hutchinson, William. *An Excursion to the Lakes, in Westmoreland and Cumberland, August 1773*. London: J. Wilkie, 1774.
- Malins, Edward. *English Landscaping and Literature, 1660-1840*. London: Oxford U.P, 1966.
- Nicholson, Norman. *The Lakers*. Milnthorpe, Cumbria: Cicerone Press, 1955.
- Ousby, Ian. *The Englishman's England: Taste, Travel and the Rise of Tourism*. Cambridge: Cambridge University Press, 1990.
- Pennant, Thomas. *A Tour in Scotland and Voyage to the Hebrides, 1772*. 2 Vols. Chester: John Monk, 1774-5.
- Plaw, John. *Rural Architecture; or Designs, from the Simple Cottage to the Decorated Villa*. London: J. and J. Taylors, 1785.
- Plumptre, James. 'Narrative.' Cambridge University Library MS. Add. 5815, f. 288.
- Scott, John. *Amwell: a Descriptive Poem*. Dublin: S. Price, W. Watson, J. Potts [and others], 1776.
- Watkin, David. *The English Vision: The Picturesque in Architecture, Landscape and Garden Design*. New York: Harper & Row, 1982.
- West, Thomas. *A Guide to the Lakes: dedicated to the lovers of Landscape studies, and to All Who Have Visited, or Intend to Visit the Lakes in Cumberland, Westmorland, and Lancashire*. London: Richardson and Urquhart, 1778.
- . *A Guide to the Lakes, in Cumberland, Westmorland, and Lancashire*. The second edition. [The editor's preface signed: X., i. e. William Cockin.]. London: Richardson and Urquhart, 1780.
- Wordsworth, William. *Guide to the Lakes. The Fifth Edition. Ed. E. de Selincourt. 1835*. Oxford: Oxford University Press, 1977.
- 今村隆男。「風景と想像力ーウィンダーミア湖畔のクライフ・ステーションをめぐるー」『和歌山大学教育学部紀要』(人文科学編、和歌山大学教育学部)第57集, 2007年.
- 小田友弥。「トマス・ウェストの『湖水地方案内』: 湖水地方旅行の新時代到来の予示」. 『山形英語研究』5号, 2000年.

